

# 疵

きず

## 本田靖春

花形敬とその時代

又春文庫





文春文庫

---

疵 花形敬とその時代

定価はカバーに  
表示してあります

1987年4月10日 第1刷

1989年2月15日 第3刷

著者 本田靖春

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

---

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan  
ISBN4-16-726304-1

文 春 文 庫

きず  
疵

花形敬とその時代

本 田 靖 春



文 藝 春 秋



# 疵

花形敬とその時代



〔川崎発〕二十七日午後十一時十五分ごろ神奈川県川崎市二子五六さき路上で、二人組のヤクザふうの男と口論していた男が、二人組の男の一人から鋭い刃物で心臓を突き刺されて間もなく絶命した。通りかかった同番地デパート店員田口義順さん（三五）と、通行中の高校生二人（いずれも十六歳）が、百五十<sup>メートル</sup>追いかけて、多摩川土手に追いつめたところ、二人組の一人がピストルで田口さんめがけて発射、田口さんは右肺を撃たれて出血多量で重体。犯人たちは待たせてあった黒塗りの乗用車に飛び乗り、別のもう一人の男の運転で東京方面に逃走した。

近所の人から一〇番の通報を受けた川崎・高津署は全署員を非常招集するとともに、隣接する中原、稲田両署の応援を得て捜査している。殺された男は持っていた自動車運転免許証か

ら東京都世田谷区船橋町一〇九四花形敬さん(三)とわかった。

花形さんは東京・渋谷をナワ張りにしている暴力団「安藤組」の大幹部。三十三年六月、銀座のビルで東洋郵船社長横井英樹氏をピストルで撃った「横井事件」では、安藤昇組長の参謀として襲撃計画をたて、東京高裁で殺人未遂ほう助罪などで懲役二年六月の判決を受けた。

その裁判で保釈中には、三十四年六月二十日、七月三十一日と続けて二回も渋谷署員に乱暴を働いてつかまるなど、前科だけでも七犯、二十四回もの逮捕歴がある暴力団員。安藤組長が服役中、安藤組の事実上の親分格となっていた。

渋谷署では、安藤組は横井事件で安藤組長ら幹部が逮捕されて以来、すっかり落ち目だが、I一家が横浜―川崎―東京とナワ張りをひろげ、渋谷で安藤組とことあるごとに対立、いざこざが絶えず、最近その対立が深刻になってきたため警戒していた矢先だった。(昭和三十八年九月二十八日付け読売新聞朝刊)

住宅で埋めつくされた現在の姿から、戦前の世田谷区粕谷町を想像するのは不可能である。区部に属しているとはいっても、東京の西のはずれに近く、そのころの粕谷町は農村のたたずまいを見せていた。

あたり一帯は、関東ローム層が黒ずんだ地肌をのぞかせる畑の広がり、単調な風景の中に、わらしいてアクセントを求めれば、めいめいに藁屋根を抱いて繁みをつくる武蔵野特有の雑木林が、

そこそこに見られるくらいのものであった。

晴れた日には、真西の方角に富士山が遠望されたが、これを借景というには遙かすぎて、郷土の自慢にはなりにくい。つまりは、何の特徴もない土地柄であった。

そのような粕谷町の麦畑の一劃を矩形に切り取って、東京府立千歳中学校の校舎が建設されたのは昭和十六年のことである。工事の槌音つちおとに合わせるようにして、日本は十二月に迫った太平洋戦争の開戦へと歩を進めつつあった。

これより早く昭和十四年二月に、千歳中学校は府立第十二中学校の名称で、赤坂区青山北町に創立されている。そして、同じ年の四月八日、二百五十人の第一期生を迎えて、最初の入学式が行われた。

この十二中にあてがわれたのは、東横線沿線に新しい敷地を求めて移転して行った青山師範の旧校舎の一部であった。

変則的な仮住まいでの学校発足は、国家が破綻へと向かっていた時代の一つの表れであったといえよう。

取り壊される予定の青山師範跡に十二中が誕生したとき、そこには一年前に開校した十一中（現都立江北高校）が入っていた。

十一中は、ほどなく完成した自前の校舎へ移って行くが、それで二校の同居という変則的な状態が解消されたわけではない。そのあとに、翌十五年に創立された十三中（現都立豊多摩高校）が入り込むのである。

十二中は青山の仮校舎で、さらに二期生と三期生を迎え入れた。

予定された所在地に校舎が建たないうちから、このようにして中学校の増設が進められた背景に、東京の人口膨張がある。それまでの府立中学校といえば、第一に始まって第十に終わる十校を数えるだけであり、急カーブを描いて上昇する首都への人口流入は、それらの門戸を年ごとに狭めていた。府当局は、深刻化する進学難への対応を早急に迫られていたのである。

ちなみに、敗戦時における都立中学校は二十四校であった。普通科の男子校だけでも、八年間に十四校が新設されたのである。職業科や女子校を加えると、かなりの数にのぼるであろう。戦争目的がすべてに優先していた時代にあつて、そのような学校づくりが設備の面で粗製乱造になったとしても不思議はない。中国大陸で消耗を続けていたところへ持って来て、物量を誇るアメリカが相手の戦争である。中学校の建設に充分な資材が回されるはずもなかった。

昭和十六年の新学期から府立中学校はそれぞれが属する地域の名を冠した校名に改められ、まだ青山にあった十二中は、落ち着き先の最寄りの駅となる京王線の千歳烏山にちなんで、府立千歳中学校と改称される。その年の七月、新校舎の第一期工事が終わった段階で、青山を引き払い世田谷に移転した。

ようやく借り物ではない校舎での生活が始まるのである。しかし、その日を待ち望んでいた生徒たちは、麦畑の真ん中にぽつんと立つ、木造二階建て校舎一棟に講堂だけというみすばらしい学舎を目のあたりにして、一様に落胆を味わわなければならなかった。

校門もなければ、校庭の囲いもない。農道の行き止まりに立てられた二本の木製の柱が、敷

地のはじまりを示しているだけであった。

当初の計画では第三期工事まで予定されていたが、移転の五カ月後に太平洋戦争が始まって、世田谷における唯一の府立中学校は、それにふさわしい体裁を整えることが出来なかった。第二期工事以降が打ち切られてしまったのである。

緒戦の勝利に酔っていた昭和十七年が過ぎて、新しい年が明けると、太平洋方面の戦況がにわかには悪化して、一月二十八日のソロモン群島ガダルカナルからの日本軍撤退を契機に、米軍がぜん反攻に転じる。その年の四月、千歳中学校に五期生二百五十人の一人として、白面、長身の少年が入学した。花形敬である。

花形敬というのはもとより本名であるが、その上に彼の後年を重ね合わせると、それがあたかもプロボクサーのリング・ネームのように、肉体と肉体との闘いの場における彼の存在感をひととき引き立たせる目的で、工夫して作りだされたもののように思えてくる。

復員軍人、特攻隊帰り、予科練崩れ、外地引揚者、浮浪者、戦災孤児、朝鮮人・台湾人徴用工、かつぎ屋、闇屋やみや、故買商、娼婦、シケモク売りの少年、ヤクザ、すり、かつ払い、追い剥はぎ、強盗……それら流民、窮民がその日の糧を求めてこつた返す焼け跡・闇市の時代に、東京の盛り場渋谷を足場にして暴力の世界でのし上がった彼は、その時代を表徴する「花形」であり、周囲に畏「敬」される存在であった。

彼の名前は、非業の死をとげてから満二十年になるいまなお、極道者のあいだで、喧嘩の強さにかけて花形の右に出るものは、過去にいなかったしこれから先もたぶん現れない、とい

ったふうに、感慨をこめて語られている。

暴力が忌むべき反社会的行為であることは論をまたないが、体制が崩壊して法と秩序が形骸化し、国家権力の行方さえ定かではなかった虚脱と混沌の時代を背景にした暴力を、国民の八割までが中流意識を表明する今日の感覚で捉えたのでは、何も見えてこない。

東京の闇市にひしめいていたのは、ひとしく飢えていた人びとであり、焼け跡には良民とアウトローを分ける明確な境界線は引かれていなかった。

したがって、暴力団幹部といえども、彼を時代から抹殺するいわれはない。むしろ、花形敬を採り上げることにより、「戦後」に至る昭和史の一つの側面が浮かび上がってくるはずである。

私にとっての花形は、千歳中学校における二年先輩であった。彼を暴力の世界に、私を違法の枠組内に吹き分けたのは、いわば風のいたずらのようなものであった。

ごく短い期間であったにせよ、花形と私は一つ屋根の下にいて、時代を分け合った。彼について語るとき、私が抱き続けている、飢えてこそいたが、人間臭さが立ちこめ、解放感に満ち溢れていた「戦後」への郷愁と無縁ではあり得ないのである。

花形敬は小田急線経堂駅に近い東京都世田谷区船橋町の旧家に生まれた。花形家といえば、土地に古い人ならだれでもその存在を知っている。

菩提寺である豪徳寺の常徳院を訪ねると、花形家歴代の墓に天正（一五七三）一五九二の年号を見ることが出来る。

一族の血筋をさかのぼれば、武田二十四将の一人に行きつくのだという。甲斐国から落武者となって流れついたと言い伝えられる先祖の詮索はともかくも、明らかにされているだけで二十代、四百年にわたって続く花形家が、世田谷の有数な旧家である事実は動かない。

本家の血筋を引く花形すが子は、幼いころ祖母から自慢話をよく聞かされた。家から現在の京王線下高井戸駅前まで直線距離にして約一・五キロの間、他人の土地を踏まずに行けた、というものである。

花形家は一巡するのに半時間はかかるという宅地の中に、テニス・コートを持ち、門番まで住まわせていた。

その祖母の連れ合いが花形家十七代の当主で、花形敬の祖父にあたる長之助である。彼は土地の政治に重きをなして、戦争の激しいころ、仕込杖をついた壮士風の男たちが足繁く彼のもとに出入りしていた。

長之助の長男は明三といって、その名前が示す通り明治三年の生まれである。翌年、一帯は品川県から東京府荏原郡に編入された。そのかげに長之助の働きがあったといわれる。

明三は早稲田大学の前身である東京専門学校を卒業したあと家督を譲られて、資本主義勃興期に牽引車の役割を果たすことになる繊維産業に目をつけ、人造絹糸の製造に大々的に乗り出した。着眼点はよかったのだが、技術上、まだ解決されていない問題が多く、失敗して父祖伝

来の土地をかなり手放す羽目になった。

それでも、青山六丁目に敷地五百坪の豪邸を構え、尾張町に店舗を持って、マニラから輸入したカーペットやカーテンを販売していたというから、花形家の財力のほどがしのばれる。

明治四十五年三月、明三が数えの四十三歳で若死にし、半年後の九月、彼の妻も後を追うようにして逝った。二人のあいだの一男二女は本家に引き取られたが、翌大正二年、男の子と長女が相次いで夭折した。残されたのが、明治四十三年四月生まれで数えの三歳だった前出の花形すが子である。

彼女は本家にいた女中の一人に背負われて、その知り合いの家に預けられた。そして、六歳のとき、本家に戻される。長之助の死がきっかけであった。

すが子が祖母から聞いた話によると、長之助は別当つきで迎えにくる四頭立ての馬車に乗って、毎日、宮内省に出仕していたが、その馬車で宮城から退出して来たところ、通りかかった市電にぶつかって、事故死したのだという。この祖父がどういう役職にいつごろからついていたのか、すが子は知らない。

しかし、祖母が紋付きの胸に十六弁の菊の紋章をつけて、一般には入場が許されていなかった新宿御苑での観桜会や観菊会に出掛けていたのはよく憶えている。

本家に呼び戻されたすが子は、長之助の遺志により、明三の弟の武平が後見人に立って戸主となった。

武平も明三と同じ東京専門学校出身だが、兄の事業の失敗が彼を消極的にさせたのか、こ

れといった仕事にもつかず、本家のそばに敷地三百坪の家を建て、朝から好きな酒に親しんで安逸な生活を送っていた。その家を建てたとき、地ならしのために掘り返すと、土の中からカメにおさめられた小判がかなりの量、出て来たという。

すが子は十六歳で廃嫡となり、武平が花形家の家督を継いだ。明三が十八代で、実質的にはすが子に代わる十九代の当主ということになる。

その武平のもとに、経営難に陥った地元の第一女子商業という学校が助力を求めてきたことがある。武平は頼まれるままになにがしか土地を売って、再建のための資金を注ぎ込んでやったが、頽勢<sup>たいせい</sup>を挽回することができずに終わった。

兄明三がかなりの土地を失ったとはいっても、地元の学校から資金援助を求められるあたり、花形家の財力はまだまだ付近で際立っていたのである。

第一女子商業の跡を買い受けたのが恵泉女学園で、いまでも花形家のそばにあり、短大にまで続く学園を形づくっている。

武平の下が花形敬の父親となる正三である。

明治十七年に生まれた正三は、早くから海軍士官を志し、海軍兵学校への近道とされていた海城中学校に通うため神田に下宿した。当時、世田谷には電車もバスも通じておらず、明三と武平も学生のあいだは、東京市内の下宿から通学したものである。

正三は海軍兵学校を目指して猛烈に勉強したが、それが裏目に出て近眼の度が進み、彼ののぞみは絶たれた。そこで思い立ったのがアメリカ留学である。

まず、海軍に憧れ、それが駄目だとなると、今度は海外を目指す。こうした正三の外向性は、こもりがちな武平とは対照的で、のちにその負けん気の強さとともに、花形の体内に受け継がれる。

正三は中学校を終えてから外国語学校で英語を学び、頃合をはかって父長之助にアメリカ留学の許しを求めた。それを聞いて長之助が激怒する。

「悪いことをしたわけでもないのに日本にいられないような奴は、おれの息子じゃない。勘当だ」

というのである。

それでも正三はアメリカ留学をあきらめなかった。結局、母親が隠れて資金の面倒を見、明三と二人で横浜港に彼を見送った。

正三が、単身、乗り込んで行った先は、西海岸のシアトルであった。

さらに本格的な語学力を身につけるため、彼は小学校の高学年からやり直し、努力の甲斐があつて、土地の名門校ブロードウェイ・ハイスクールに進学できた。この学校では、学年から五人の優等生が選ばれる。そのうちの二つを、正三ともう一人の日本人が占めた。

正三の次の進学先は、ワシントン州立大学であった。すべてが順調に進むかに見えたとき、彼は肺結核を病み、中途退学を余儀なくされる。学園を去って療養生活を送るうち、シアトルのキャディラック・ディーラーに勤めることになった。

大正六年、父長之助死去のしらせを受けて、正三は一旦帰国する。このとき、彼は三十三歳

でまだ独身であった。すすめる人があつて見合いをし、結ばれたのが美以である。

美以は明治二十七年に、長州萩の旧士族である来須家の一人娘として生まれた。上京して来たのは、明治天皇のあとを追って乃木希典夫妻が殉死したときだというから、数えて十九の年である。

同じ萩に玉木家というのがあつて、軍籍に身を置くその当主、玉木正之は、母一人を郷里に残し、いまの世田谷区役所の近くに居宅を構えていた。

萩の玉木家は河原に面していて、ちょっとした長雨にぶつかると、床に水が上がってくる。女の一人暮らしでは不安だということで、懇意にしていた美以の両親が身の面倒を見ることになって同家に入った。彼女が三歳のときである。

正之の父は文之進といって乃木將軍の実弟だが、玉木家に跡継ぎがいなかったため、その養子に入った。

伯父にあたる將軍の自刃の報を、正之は金沢の演習場できいて、遺骸の枕頭にかけてける。萩にいた美以が上京したのは、正之の要請を受けて、ごった返す世田谷の玉木家を手伝うためであった。そしてそのあとも、乞われるままにとどまっていたのである。

当時としては適齢期を逸しかけていた美以に、周囲が心を配っていたのであろう。アメリカにいて、これまた結婚の時機を失していた正三との縁談は、とんとん拍子に進んだ。

正三が新妻を伴ってシアトルに戻ると、彼が大学時代にスクール・ボーイをしていたとき、その人柄を見込んだ大学関係者が奔走してくれて、高級住宅地にある裕福な金物卸商の邸宅の